

Title	zu不定詞句は名詞句か？
Sub Title	Ist die zu-Infinitiv-Phrase eine Nominalphrase?
Author	鐵野, 善資(Tetsuno, Yoshisuke)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2003
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.20 (2003. 3) ,p.145- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別寄稿
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20030331-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

zu 不定詞句は名詞句か？

鐵野善資

本稿ではもっぱら「zu 不定詞句」、すなわち zu を伴う不定詞句に関わる問題点のみを取り扱うこととする。

表題の問いに対する論者の答えは「否」である。ドイツ語の学習時代から何か釈然としないものを感じつつ、この不満感はドイツ語教員になってからもなかなか解消しなかった記憶が残っている。

zu なる前置詞の原義及びそれを伴う表現形式の表さんとするものを一義的に捉えようとする試みである。論者には「副詞句」としての解釈しか思い浮かばないところであり、この解釈で首尾一貫して論じてみたい。派生的にさまざまな現象に出遭うことになるが、それらに対して論者なりの解釈、解決策の概略をご高覧に供する。

先ずは次の2文を比較検討することを通じて、「不定詞句」と「zu 不定詞句」の差異を確認しておきたい。

A Ich möchte nach Deutschland fahren. (不定詞句)

ドイツへ行きたいのですが。

B Ich entschließe mich, nach Deutschland zu fahren. (zu 不定詞句)

ドイツへ行くことに決めます。

このように「不定詞句」と「zu 不定詞句」には、明らかに使い場所が異なる場合があり、交換は許されていない。とすれば、それぞれの表すところは自ずから異なっているはずである。然るに、いずれも「…すること」と解して済ましていることが多いように思われる。

A について見れば、nach Deutschland fahren は「ドイツへ行くこと」という「不定詞句」で、元来は möchte 「…(を)したいのだが」の補足語[目的

語]の立場にあり、名詞句「ドイツへ行くこと(を)」として機能している
と考える。

因みに、本来名詞でないものを名詞化する場合、中性名詞扱いとなる文
法規則が存在するが、不定詞を名詞化したものが中性名詞として用いられ
ることもこの不定詞句の用法と軌を一にするものである。不定詞 *husten*
「咳をする」から *das Husten* 「咳をすること」が得られる一方で、*der*
Husten 「咳」は本来の名詞扱いである。

これに反して、B について見れば、*entschließen* は 4 格の *sich* と密接に
結びついている再帰表現で、A のように名詞句を目的語にとることは考え
られない。*sich entschließen* 「決心する」が「ドイツへ行くことを」と結べ
るではないかという反論があるかもしれないが、それは無理というもので
あろう。日本語で考えることは許されない。元来、*sich*⁴ *entschließen* は
*sich*⁴ *zu et.*³ *entschließen* という結びつきで用いられるものあって、*et.*⁴ と結
ぶことはない。

この場合の *zu et.*³ あるいは「*zu* 不定詞句」は「補足語 (*Ergänzung*)」であ
るが、この「*zu* 不定詞句」は、*zu et.*³ に対応している「前置詞句」と考え
るのが妥当であろう。因みに、ドイツの文法書において「前置詞付きの不
定詞 (*präpositionaler Infinitiv*)」という表現が用いられるのもこの間の事情
を示すものである。

ここで、論者のこだわりの対応関係を示せば、

<i>nach Deutschland</i>	<i>fahren</i>	ドイツへ行くこと
<i>nach Deutschland zu fahren</i>	ドイツへ行くこと	<u>に (おいて)</u> ,
	行くの	<u>に</u> ,
	行く	<u>ために</u>

となる。

要するに、論者には、「*zu* 不定詞句」は「前置詞句」であり、文中での
機能は「副詞的」なものに思えてならないのである。

*zu*の意味・機能

前置詞 *zu* は、元来、物の「所在」、動作の「場所」あるいは「到達点」
を表すものであり、「*zu* 不定詞句」はその用法の名残と考えられる。

der Dom <u>zu</u> Köln	ケルンの大聖堂 [<u><ケルンに(ある)大聖堂</u>]
<u>zu</u> Hause sein	家 <u>に</u> いる
<u>zu</u> Bett gehen	寢床 <u>に</u> つく
<u>zur</u> Schule gehen	学校 <u>に</u> 行く

ドイツ語以外の言語においても軌を一にする表現があるのは大いに興味を惹くところである。

フランス語からきた言葉に「プレタポルテ」があるが、フランス語では *prêt à porter* 「身に着けるのに用意できた」であり、ドイツ語に直訳すれば *bereit zu tragen* である。この *à* は *à Paris* 「パリに、パリで (<にて)」の *à* と同じ語である。「パリに住む」ならば *habiter à Paris* であり、「パリに行く」ならば *aller à Paris* である。

英語ならば、*ready to wear* であり、ドイツ語の *zu* に対応するのは申すまでもない。*to* が「場所」を表す表現はあまり見かけられないが、古英語には現代英語の *at home* に相当する *to ham* [ドイツ語に直訳すれば *zu Heim*] が存在する。「時」を表す意味では、*to-day*, *to-morrow* の *to* がこれに相当する。ドイツ語にも、*zu Abend essen* 「夕食をとる (<夕方に食べる)」のような例がある。そして、北ゲルマン語に属するスウェーデン語では、「プレタポルテ」が *beredd att bära* と表現される。

余談にわたるが、英語で「…したい」を表す *want* が「*to* 不定詞」と結ぶのも「…すること (を)」欲するということではなくて、「…することに (おいて)」不足を感じるところから来ているのであらうと思われる。論者なりの解釈をすれば、*want* は元来「不足を感じる」という自動詞であらうということになる。

以下は具体例に基づきながら、折々に論者の考えを付記することにした。

Kalt trinken schadet der Gesundheit.

冷やで飲むことは健康に害となる。

この不定詞句が主語であると考えることには異論のはさみようがない。ここは素直に受け止めることとする。

Kalt zu trinken schadet der Gesundheit.

冷やで飲むのは健康に害となる。

kalt zu trinken が文頭に置かれる場合は、これを主語だと言いたくなる気持ちも分からないではないが、前述の如く、「zu 不定詞句」が名詞句と考えられない以上、別の整合性のある解釈を下さなければならない。

この構文を日本語に訳すに際しても、「…することは」とするのは避けたい。「…すること」という表現を準体助詞の「の」を用いて「…するの(に)は」とすることで、自然な日本語で表現することができる。通例は「に」を省略して「…するのは」と訳せばまず抵抗はないであろう。因みに、テーマ・主題を表す「は」が主語を示す格助詞でないことは周知のことであり、そして、これに先行する格助詞は往々にして省略されている。要するに、「zu 不定詞句」は主語ではないのである。

そこで schadet をどのように理解すればよいかが問題となる。3 人称単数で、無主語の文と捉える他はなく、これこそまさに非人称の無主語文と考えられる。直訳すれば「冷やで飲むのには健康に害となる(状況がある)」となるであろう。

Es schadet der Gesundheit, kalt zu trinken.

文頭に es を置いた文では、es = kalt zu trinken と考えたくもなるし、現にそういう対応が普通になっているようであるが、この文は文頭の kalt zu trinken を文末に移動した結果できたものである。つまり、この言い換え文の文頭の es は「zu 不定詞句」を代表しているのではなくて、定形第 2 位を保障する「文頭の空位を埋める es」と考えるべきである。先の「zu 不定詞句」が文頭に立っている文は、要するに、「どういう点で」ということが「zu 不定詞句」で示され、「健康に害となる」という非人称の無主語文が後続していると考えられる。蛇足を加えるならば、es は元来なくてよかったものであり、省略されるという考えは本末転倒である。元来ないものを省略するわけにはいかない。一般に「省略」という語が安易に用いられているような気がしてならないのは論者だけであろうか。

「どういう点で」という表現を用いたが、NHK の英会話講座のある講師が to be on the safe side を「安全な側につくという点で」つまり「用心・安全のために」という意味であると説明し、

I don't think it's a good idea to flash your money around here.

この辺りで札束をちらつかせるのはあまり得策とはいえないな。
という文について、「いい考えではない…という点で」という解説を施していたのは、まさに我が意を得たりであった。

Unser Ziel ist, an der nächsten Weltmeisterschaft teilzunehmen.

我々の目標は、次の世界選手権に参加することに/である。

ここで取り扱っていることに関連して用いられる動詞 sein は存在を表す「ある」であって、いわゆる A = B の等号・コブラと考えると理解できなくなってしまう。sein はしばしば「…である」というように捉えられているが、上文については、「我々の目標が存在する」のであろう。

Unser Ziel ist es, ... のように es が用いられることもあるが、これは sein と「zu 不定詞句」の結びつきに異和感が生じ、それを緩和するために「空位を埋める es」を用いたものと考えられる。形式的な処理が進行している一つのケースであろう。

因みに、「…で」は、「niokite > nioite > nite > nte > de」のように約まったもので、前置詞 zu の意味に通ずるものがある。「で」は「場所」を表すと同時に「手段・道具」を表すものでもある。

ロシア語で、「学生で」あった/あるだろう、という表現において、「手段・道具」を表す「造格 (Instrumentalis)」が用いられるのはきわめて示唆的である。「学生(という形)で」存在した/するだろう、という表現である。学生「なり」についても、「なり<にあり (nari < niari)」の「に」が認知できるであろう。「に」もまた「場所」を表している。

さらにもう一つ触れておきたいのは、fleißig arbeiten と fleißig sein の扱いが首尾一貫していない点である。arbeiten と共に用いれば fleißig は副詞であり、sein と共に用いれば形容詞であるとするのは、少なくとも論者には納得がいかないのである。arbeiten も sein も動詞であり、これを詳述するのは副詞である。本稿では一貫して sein をコブラとして理解することはしない。

ここで一つ、規則を立てておく必要がある。「名詞に前置される格語尾

を伴ったものを形容詞とし、この条件を欠くものは副詞とする」という確認をしておけば、種々の場面で統一的な解釈を下すことが可能になる。

名詞に後続している無語尾形の語は副詞であり、両者の間に「ある/…における」という意識が暗黙の了解として横たわっていると考える。例えば、Röslein rot は「赤く(ある)小さなバラ」あるいは「小さなバラ赤く」と考えられるし、以下に触れる名詞付加的な「zu 不定詞句」の説明にも有効である。

Ich habe Lust, nach Deutschland zu fahren.

ドイツへ行く気があります。

この場合は、「zu 不定詞句」が副詞的に、後ろから Lust にかかっていると見ることが可能である。「ドイツへ行くことに(おける)気がある」というわけである。

Ich hatte nicht die Absicht, ihn zu verletzen.

彼を傷つける意図はありませんでした。

「彼を傷つけるという点で、その意図はなかった」というわけで、すでに述べたとおり、名詞に後ろから説明をつける場合も「彼を傷つけることにおけるその意図」のように、副詞的要素と考えられる。die Dame dort 「あそこのご婦人<あそこに(いる)ご婦人」などの dort と同じ関係で捉えることが可能である。「という」というつながりをはさんで、形容詞的と称し、あるいは同格的に捉えようとするには無理があると思われる。

Ich habe mich darüber gefreut, ihn wiederzusehen.

彼と再会してうれしかった。

「彼を再見することにおいて」という副詞句は、代名詞的副詞 darüber の dar-の部分に対応しているものと考えられる。「zu 不定詞句」があらかじめ es で受けられて、それが前置詞の über と結合して darüber になると説明されるのが普通のようなのであるが、これは納得がいかず、大いに悩まされたところである。ここにも es が「zu 不定詞句」に相当するという先入観が働いている。余計なことを考える前に、すでに述べた如く、「zu 不定詞句」が「所」を表す副詞句であることを認識すれば、「先取りの da(r)-」はこれ以上見事に対応しているものもないのではないかと思われるほどである。dar は「そこで」という「所在、位置」を表すものであり、英語の there に

相当する。現代語の damit がかつては darmit であったことを想起する必要がある。また、英語の therewith も副詞と理解されているわけで、darüber の über が前置詞であるという認識も改めるべきであろう。dar も über も副詞である。

Sie ist stolz (darauf), Deutsch sprechen zu können.

彼女はドイツ語が話せるのが自慢である。

代名詞的副詞 darauf が常に文中に現れるわけではないが、論者の認識としては、「zu 不定詞句」の補足の程度が十分に機能する限りにおいて、代名詞的副詞は必要がなく、ここに不十分という意識が生じるに及んで、代名詞的副詞の投入の必要が生じるものとする。代名詞的副詞が省略されるという考え方は逆方向の考え方であるように思われる。

Sie hat ihn gebeten, sie am Bahnhof abzuholen.

彼女は彼に、駅に迎えに来てくれるように、頼んだ。

bitten は前置詞 um を伴う句を補足語として要求するのが通例ではあるが、「zu 不定詞句」と共に用いられる場合は、代名詞的副詞 darum が現れないのが普通のように思われる。この場合の「zu 不定詞句」が本来の機能を維持していて、動詞との結びつきを仲介するものの必要を感じさせないのである。

Sie hat mir versprochen, pünktlich zu kommen.

彼女は私に、時間どおりに来ると、約束した。

このような場合の動詞 versprechen は、目的語を言わずに、すなわち「絶対的に」約束する行為を表していると考えられる。「どういう点で」を「zu 不定詞句」で示しているわけである。動詞との対応関係では、「zu 不定詞句」は補足語乃至は状況語として機能しているものであるが、本来は他動詞として機能する動詞の場合においても、目的語を必要としない「絶対的用法」と考える。

Ich halte es für nötig, die Ursache des Unfalls zu klären.

その事故の原因を明らかにするのは必要だと思います。

ここでも「zu 不定詞句」の意味・機能に対する解釈を変える必要はないが、es の処理を明らかにしなければならない。英語の Take it easy. , ドイ

ツ語の Ich habe es eilig. などにおけるように、不定の目的語はこうしたケースに用いられる動詞の他動詞性を充足させるためであろうと考える。

Ich bin gerne bereit, Ihnen bei der Arbeit zu helfen.

よろこんでお仕事のお手伝いをいたします。

この場合には、「zu 不定詞句」が bereit に対する補足語に当たるが、元来が zu et.³ bereit sein という形で用いられるわけで、「zu 不定詞句」がまさに zu et.³ という前置詞句に相当している。

〔参考：Ich bin zu jedem Opfer bereit. 「どんな犠牲もいといません。」であり、直訳すれば「私はどんな犠牲にも覚悟ができています」ということになる。〕

ここまでの「zu 不定詞句」は、ドイツ語の「zu 不定詞」が句末にあるところから、その句頭の区切りを示すべくコンマを打つものを取り上げて論じたが、以下には、そこに現れるすべてが「zu 不定詞句」であるが故にその先頭を示す必要のないものについて考えてみる。

Man hat die Akte noch einmal genau zu prüfen.

この書類はもう一度厳密に調査しなければならない。

直訳すれば「(人は)この書類をもう一度厳密に調査するのに持つ。」となるが、この表現は元来、haben の4格目的語を伴うものであり、「能動表現」になっている。ただし、不定代名詞 man は主語が特定できない場合に用いられるものであるから、「受動表現」と相通ずるものがあることも認識しておく必要がある。この表現、zu 不定詞句と haben の構造は結果的に「…すべきである(能動+必然)」を意味することになる。

Ich habe jetzt noch zu arbeiten.

これからまだ勉強しなければなりません。

上述の如く、この表現形式は元来「4格目的語」を伴ったものであるが、上例のように目的語のない表現も許されている。形式的に英語の have to に相当する。

Wir haben leider nichts mehr zu trinken.

私たちは残念だがもう飲み物が切れている。

これは表面的には同じように見えるが、内容的には別に必然性が感じられるわけではない。直訳すれば明らかであるが、「我々は残念ながらもは

や飲むのに何もない。」というわけで、nichts に後置された形式である。

Die Akte ist nicht leicht zu prüfen.

この書類は容易には調査できない（＜…され得ない）。

直訳すれば「この書類は容易には調査するにあらず。」となるが、zu 不定詞句とseinの構造には「受動」の意味が読み取れると言われる。その論理構造の根底に触れておきたい。die Akte は1格であるが、prüfen という動詞との本来の関係を復元してみれば、die Akte prüfen となる。これならば4格目的語である。ここで「受動表現」の基本的な原理を想起する。要するに、能動文の4格が1格に変換されるところに受動表現の本質があるわけである。さらに、上例では nicht leicht 「容易には…なく」という表現を伴っているところから、「可能性」の意が加味されている。

もっとも、いつでもはっきりと分かるようになっているわけではなくて、文脈、前後関係、または文全体の意味に対する常識的な判断によって理解しなければならないこともあるが、要するに、zu 不定詞句とseinには「…され得る(受動+可能)」と理解される場合があるのである。ただし、zu 不定詞句とseinの構造には「受動」の意は込められているが、「可能」の意は含まれていないと考える。

Die Akte ist auf jeden Fall genau zu prüfen.

この書類はいずれにせよ厳密に調査しなければならぬ

(＜…されねばならぬ)。

直訳すれば「この書類はいずれにせよ厳密に調査するにあり。」となり、前例と同じ構造である。異なっているのは、auf jeden Fall 「いずれにせよ」の部分のみである。これを通じて受け手は「必然性」を感じるであろう。zu 不定詞句とseinには「…されるべきである(受動+必然)」と理解される場合もあるのである。ただし、zu 不定詞句とseinの構造には「受動」の意は込められているが、「必然」の意は含まれていないと考える。

「zu 不定詞句」を用いた表現はある意味で曖昧さを伴うが、それで理解される可能性が高ければよろしいわけで、それなりの利用価値がある。しかし、絶対に誤解されてはならぬとなれば、「過去分詞+ werden」の受動表現と「話法の助動詞」を組み合わせたものを用いればよい。上の例文を言い換えれば、それぞれ

Die Akte kann nicht leicht geprüft werden.

Die Akte muss auf jeden Fall genau geprüft werden.

となる。

Ist Herr Schröder zu sprechen?

シュレーダーさんにお目にかかりますか。

これは人の4格と sprechen で「人と面会する」という表現であるから、直訳すれば「シュレーダーさんは面会するにありや」、つまり、「面会され得るか」となる。

An seinem guten Willen ist nicht zu zweifeln.

彼の善意は疑う余地がない。

zweifeln は4格の目的語を要求しない動詞であり、ここに見られるような無主語文になる。直訳は「彼の善意については疑うにあらず」、つまり、「疑われ得ない」である。

Das ist eine noch zu besprechende Sache.

これはなお論ぜらるべき事柄である。

直訳すれば、「これはなお論ずるに(ある)事柄である。」となる。要するに、「zu 不定詞句」の形容詞的付加語用法であるが、一般には「zu + 現在分詞」を見かけ上ひとまとめにして「未来(受動)分詞」と呼びならわしている。しかし、実際には zu と現在分詞が給びつく必然性はなく、むしろ、「zu 不定詞」に -d を附加して一見、現在分詞らしく見せかけ、形容詞の語尾をつけたものに過ぎないと考えられる。ドイツ語には、全体構造的には不合理な、目先の処理をするケースがあるが、ここにもそれが現れているのである。例えば、2, 1 Million (zwei Komma eine Million) のように実際にふさわしくない処理の行われることがある。この場合には、近年、zwei Komma eins Millionen という合理的な表現が認められるが、0, 5 Millionen などには相変わらず不合理がまかり通っているようである。ここに取り上げた表現に現在分詞が現れるのはこの不合理の延長線上にあることのように思われる。蛇足的説明を加えるならば、不定詞に形容詞の語尾をつけるわけにはいかないのである。すでに述べたことを具体的に示せば、eine noch zu besprechen-d-e Sache となる。

Das ist eine Sache, die noch zu besprechen ist.

この関係文の部分を手直しして、Die Sache ist noch zu besprechen. とすれば、すでに述べた構造であり、「その事柄はなお論ずるにあり」というわけである。この表現はいわば文語的語法である。

Man soll oft im Wörterbuch nachschlagen,

um die eigentliche Bedeutung eines Wortes richtig zu verstehen.

単語の本来の意味を正しく理解するには、たびたび辞書を引くべきだ。

「zu 不定詞句」は元来、そのままの形で「…するのに」「…するために」の意を表わすことができるが、この意味をはっきりと示すために、その先頭に um を添えることが多くなっている。この表現は、中世にはまだ行われておらず、新高ドイツ語初期の頃から用いられるにいたったとされている。つまり、前置詞句である「zu 不定詞句」を um が支配するなどと考えることはあってはならない。

Er fragte den Lehrer nach der Bedeutung eines Wortes,

(an)statt im Wörterbuch nachzuschlagen.

彼は、辞書を引くどころか、先生に単語の意味をたずねた。

この表現はさらに遅く 17 世紀の半ばから見られるようである。語の本質的な結びつきではなくて、人為的な結びつけが行われたことは、文法的に説得力のある直訳をつけることを許さないところにも現れる。次に挙げる表現との関連で触れておきたいのは、この表現が「二者択一」の意識の下に用いられることである。日本語では「…せずに」「…しないで」で済ましているが、はっきりした区別に対して鈍感であることが露呈する。こうした考え方に眼が開かれるのも外国語学習の大きなメリットである。

Man kann fremde Sprachen nicht lernen,

ohne im Wörterbuch nachzuschlagen.

辞書を引かずに、外国語を学ぶわけにはいかない。

この表現はようやく 18 世紀の初頭に見られると言われている。同時進行が可能な行動の一方を「しないで/せずに」という意識の下に用いられるものである。ここでも直訳は遠慮する。

Um die Wahrheit zu sagen, ich habe mir erlaubt, eine von Ihren Zigarren zu rauchen.

本当のことを言えば、あなたの葉巻を一本ちょっと失礼して頂きました。

この表現は、形式的には上述の形式となんら選ぶところはないが、実は「断り書き」であり、話者が自分の発言内容について、言い訳をしたり、聞き手の注意を喚起したりするための挿入句的表現である。ich habe の語順がそのことを物語っている。

また、この表現は、上述の「目的」を表すものから転じたというよりは、むしろ、um die Wahrheit「真実をめぐって」zu sagen「言うに(おいて)」という構造が元来のものであろう。ここにも論者がこだわってきた「zu 不定詞句」の本性が認められる。

英語の to tell the truth は、まったく同様に、本来の姿を保っている。

参考文献：

- | | |
|--|-------------------|
| Friedrich Blatz : Neuhochdeutsche Grammatik 2 Bde. | 1895/96 |
| Otto Behaghel : Deutsche Syntax 4 Bde. | 1923ff. |
| Hermann Wunderlich / Hans Reis : Der deutsche Satzbau 3. Aufl. 2 Bde. | 1924/25 |
| Hermann Hirt : Indogermanische Grammatik Syntax I u. II | 1934/37 |
| Charles Carpenter Fries : American English Grammar | 1940 |
| 片山 尚：ドイツ文法の根本問題 | 1948 |
| 関口存男：ドイツ語文法教程 改訂版 | 1950 |
| Hermann Paul : Kurze deutsche Grammatik (Heinz Stolte) | 1951 |
| 佐藤通次：ドイツ広文典 | 1951 |
| 田中康一：ドイツ文法通論 | 1951 |
| George O. Curme : A Grammar of the German Language
Second Revised Edition | 1952 ⁷ |
| Hans Glinz : Die innere Form des Deutschen | 1952 |
| Jean Fourquet : Grammaire de l'Allemand | 1952 |
| Gunnar Bech : Studien über das deutsche Verbum infinitum 2 Bde. | 1955/57 |
| Hans Glinz : Der deutsche Satz | 1957 |
| 伊東泰治：ドイツ語 分詞と不定詞 | 1957 |
| 桜井和市・岩崎英二郎：分詞・不定詞 (ドイツ語学文庫 7) | 1959 |
| 片山 操：英独比較 ドイツ文法ノート | 1959 |
| Johannes Erben : Abriß der deutschen Grammatik | 1959 |
| Dora Schulz / Heinz Griesbach : Grammatik der deutschen Sprache | 1960 |
| Wilhelm Jude : Deutsche Grammatik | 1961 |
| Ingerid Dal : Kurze deutsche Syntax | 1962 |

- Erich Drach : Grundgedanken der deutschen Satzlehre 1963
 武田昌一：現代ドイツ文法 1965
 Walter Jung : Grammatik der deutschen Sprache 1965
 相良守峯：ドイツ語学概論 1965
 Charles Bally : Linguistique générale et Linguistique française 1965
 Joseph H. Greenberg : Some Universals of Grammar with particular
 Reference to the Order of meaningful Elements 1966⁶
 Marvin H. Folsom : The Syntax of Substantive and Non-finite Satellites
 to the Finite Verb in German 1966
 井上義昌：詳解英文法辞典
 (A Comprehensive Dictionary of English Grammar) 1966
 Walter Schmidt : Grundfragen der deutschen Grammatik 1967
 桜井和市：改訂 ドイツ広文典 1968
 William Burley Lockwood : Historical German Syntax 1968
 Hennig Brinkmann : Die deutsche Sprache Gestalt und Leistung 1971²
 Duden : Grammatik der deutschen Gegenwartssprache (Paul Grebe) 1973
 三好助三郎：新独英比較文法 1977
 K. E. Heidolph / W. Flämig / W. Motsch :
 Grundzüge einer deutschen Grammatik 1981
 Duden : Grammatik der deutschen Gegenwartssprache (G. Drosdowsky) 1984
 William Burley Lockwood : German language 1987
 Ulrich Engel : Deutsche Grammatik 1988
 Gerhard Helbig / Joachim Buscha : Deutsche Grammatik 1989¹²
 Universal Guidebook 12 Languages in one book 1989
 Wladimir Admoni : Historische Syntax des Deutschen 1990
 Scandinavian Europe phrasebook 1992
 Joachim Buscha / Irene Zoch : Der Infinitiv 1992
 在間 進：＜詳解＞ドイツ語文法 1992
 福田幸夫：英語でわかるドイツ語入門 1995
 中山 豊：コレクション・ドイツ語 8 文法 1996
 Gisela Zifonun : Grammatik der deutschen Sprache 3 Bde. 1997
 O'Niel V. Som : Norwegisch — Wort für Wort Kauderwelsch Band 30 1999⁶
 O'Niel V. Som : Niederländisch
 — Wort für Wort Kauderwelsch Band 66 1999⁴
 Karl-Axel Daude : Schwedisch — Wort für Wort Kauderwelsch Band 28 2000⁶
 Roland Hoffmann : Dänisch — Wort für Wort Kauderwelsch Band 43 2000⁴

(慶應義塾大学名誉教授)

Ist die zu-Infinitiv-Phrase eine Nominalphrase?

TETSUNO, Yoshisuke

In dem kleinen Aufsatz werden nur „zu-Infinitiv-Phrasen“ behandelt. Die Antwort auf die Titelfrage des Verfassers lautet: Nein.

Die zu-Infinitiv-Phrasen sind keine Nominalphrasen, sondern Adverbialphrasen, und zwar fungieren sie als lokale Ergänzungen oder freie Angaben.

nach Deutschland fahren Nominalphrase

nach Deutschland zu fahren lokale Ergänzung oder freie Angabe

Die eigentliche Originalbedeutung der Präposition „zu“ bezeichnet den Ort der Dinge bzw. der Bewegungen oder den Ankunftspunkt, nicht die Richtung :

der Dom zu Köln

zu Hause sein

zu Bett gehen

zur Schule gehen

In anderen europäischen Sprachen gibt es interessante Äquivalente :

prêt à porter (fr.)

bereit zu tragen (dt.)

ready to wear (engl.)

beredd att bära (schwäd.)

habiter à Paris (fr.)

aller à Paris (fr.)

zeitliche Ausdrücke

to-day, to-morrow (engl.)

zu Abend essen (dt.)

Zu jedem angegebenen Beispielsatz legt der Verfasser seine eigenen Ansichten dar.

Kalt trinken schadet der Gesundheit.

Kalt zu trinken schadet der Gesundheit.

Es schadet der Gesundheit, kalt zu trinken.

Unser Ziel ist (es), an der nächsten Weltmeisterschaft teilzunehmen.

Ich habe Lust, nach Deutschland zu fahren.

Ich hatte nicht die Absicht, ihn zu verletzen.

Ich habe mich darüber gefreut, ihn wiederzusehen.

Sie ist stolz (darauf), Deutsch sprechen zu können.

Sie hat ihn gebeten, sie am Bahnhof abzuholen.

Sie hat mir versprochen, pünktlich zu kommen.

Ich halte es für nötig, die Ursache des Unfalls zu klären.

Ich bin gerne bereit, Ihnen bei der Arbeit zu helfen.

Man hat die Akte noch einmal genau zu prüfen.

Ich habe jetzt noch zu arbeiten.

Wir haben leider nichts mehr zu trinken.

Die Akte ist nicht leicht zu prüfen.

Die Akte ist auf jeden Fall genau zu prüfen.

Ist Herr Schröder zu sprechen?

An seinem guten Willen ist nicht zu zweifeln.

Das ist eine noch zu besprechende Sache.

Man soll oft im Wörterbuch nachschlagen,

um die eigentliche Bedeutung eines Wortes richtig zu verstehen.

Er fragte den Lehrer nach der Bedeutung eines Wortes,

(an)statt im Wörterbuch nachzuschlagen.

Man kann fremde Sprachen nicht lernen,

ohne im Wörterbuch nachzuschlagen.

Um die Wahrheit zu sagen, ich habe mir erlaubt, eine von Ihren Zigarren zu rauchen.